2022年７月３日 礼拝メッセージ

「少女の言葉、少年の体」　　岡嶋千宙伝道師

聖書 列王記 下 5章1-5, 9−14節

２週間前の日曜日、わたしはここ久宝教会で礼拝を守った後、夕方から兵庫県に移動し、6 月 19 日・20 日の2日間にわたって開催された「性差別問題連絡会・全国会議」に参加してきました。この会議は、日本キリスト教団内で、教会だけではなく社会で、あるいは世界で、未だになくならない性差別に抗うために、有志で集まって対策を考え、声を挙げるための土台を作っていこうという趣旨で行われている会議です。毎年 1 回開催されるのですが、過去二年間は、新型コロナウィルス感染症の感染拡大の影響で行われず、今回、三年ぶりに開かれました。久しぶりに再会する人たち、はじめて会う人たち。出会うこと、そして、同じ時と場でお互いの存在を感じ合い、言葉を交わすことの大切さを改めて実感しました。全体テーマとして「国家・教会・家族」が掲げられ、一日目は、三名の方たちによる発題の後、フロアを交えてのディスカッションがありました。テーマがテーマだけに、論点が多くて、大きくて、ここでまとめることはできないのですが、一つの着眼点は、「国家」「教会」「家族」に共通するもの、通底しているものがある、ということでした。その共通するもの、特に、家父長的な制度や思想が、人々の間に分断を生み、差別を生じさせる要因となっているのではないか、ということが話し合われました。二日目は、少人数のグループに別れての話し合い。わたしが入ったグループでは、自分の属する教会で、性にまつわる偏見や固定概念がはびこり、そのために居心地の悪さを覚えたり、苦しんだりしている人たちが多いということが語られました。その状況を変えるために声を挙げると、周りの方たちも表面上は耳を傾けてくれて、おそらくその言葉は音として頭に入ってはいるのだろうけれど、現状を変えるだけの動きに繋がることはほとんどない、という嘆きの声も聞かれました。「人は変われるのか」……。様々なところで取り上げられる話題です。少し前のものになりますが、「NARUTO −ナルト−」というテレビアニメで、ある登場人物が「人は絶対に変われない！」と主張したのに対し、主人公のナルトが「変われないって勝手に決めつけるな！」と反論している場面が描かれていました。わたしたちが生きる社会。様々なところで歪みがあります。人々の間に対立や争いが生じ、格差に基づく差別が生まれています。その状況を変えたいと願います。誰もがその人らしさを否定されず、自分らしく生きていける社会であれば良いと願います。そのために、必要なところは変えていって、より良い社会を、世界を築き上げることができればと切に思います。人は変われるのか。世界は変えられるのか。本日の御言葉によると、答えは「イエス」。人は変われる、変えられる。でも、どうやって？ しばしの間、共に、御言葉から引き出されるメッセージに目を向けてみましょう。

５章１節「アラムの王の将軍ナアマン」。アラムというのは、かつて、中東の北西部にあった国の名前です。今で言うシリアが位置しているところ。当時、今から約３千年前のことですが、イスラエルは、南北二つの国に分かれていました。そのうちの北側、イスラエル王国と呼ばれている方がこのアラムの国と隣接していました。そのアラム王国の重鎮。軍のトップ、将軍であるナアマン。彼は、王様のために、軍を率いて、戦場でたくさんの勝利を納め、「力ある勇士」として「王のお気に入り」となっていました（5:1）。武人としての名声もあり、権力も、社会的地位もある。さらに、５節には「ナアマンは銀十キカル、金六千シェケルを手にして」とあります。銀十キカルは現在のレートで換算すると、約 3,500 万円。金六千シェケルは約６億円。かなりの金持ちです。権力、地位、名声、財力。それだけではありません。ナアマンという名前は、「心地よい、美しい、愛しい」という意味を持つ言葉に由来します。ですから、ナアマンは、外見も優れていたのでしょう。そんなナアマンでしたが、ひとつ欠点がありました。病気を患っていたのです。聖書協会共同訳では「規定の病」、新共同訳では「重い皮膚病」と訳されていますが、具体的にどんな病気であったのかは、分かりません。分かるのは、力もあり、王のお気に入りとまでなった人物でさえ、どうにかして治したいと必死になるほどの病気だった、ということです。そんな思いを抱いていたナアマンに、あるとき、耳寄りな情報が届けられます。イスラエル王国にいる預言者に会えば、病気が癒されるというのです。ナアマンは早速、アラムの王様の許しを得て、イスラエル王国へと旅立ちました。そして、預言者のもとに出向き、その人エリシャの語った言葉通りのことをして、ナアマンの病が癒された。これが話の大筋です。

ある解説によると、この物語で伝えられているのは、境界線を越えることであるそうです。あちらとこちらを分ける分断線を越えていく。そして、その先に、あるいは越えること自体に、人々に変化をもたらす神の救いが備えられる、と説明されています。確かに、本日の箇所にはたくさんの境界線が張られています。イスラエル王国とアラム王国の国境による境界線。王様と家臣という身分に基づく境界線。ナアマンに預言者のことを伝えた彼の妻と、ナアマン自身が持つ性別の境界線。軍人ナアマンと、言葉の人（文人）である預言者エリシャに示される職業に基づく境界線。そして健常と病気の境界線。ナアマンはそれらの境界線を越えています。女性である妻の言葉に耳を傾け、上司である王に謁見して自分の考えを伝え、イスラエル王国との国境線を越え、預言者エリシャに会いに行っている。その結果、病が癒され、病気の身から健常の身へと変わっていったのです。境界線を越えるということではその通りなのだけれども、では、何がそうさせたのでしょう。もちろん、病気を治したいというナアマン個人の強い思いがあったことは事実です。ですが、その癒やしのためには高いハードルがありました。多くの、そして大きな境界線を越えないといけません。それは、ナアマン個人にとって、到底受け入れることのできないようなことでもあったはずです。なのにナアマンは動いた。その要因となるものはなんだったのでしょう。何が、ナアマンを変えさせたのでしょう。

５章２節「イスラエルの地から一人の少女が捕虜として連れて来られていた」。鈍器とも言えるほどの厚みを持つ聖書の中で、たった一ヶ所、しかも、全部で３節という短い記述の中にしか登場しないこの少女。名前も記されていない完全な脇役。おそらく多くの人がさらっと読み進めて、すぐにその存在を忘れてしまうであろう人物。この少女は、ナアマンとは正反対の存在です。まず、当然に女性。ナアマンは男性。しかも彼は、権力を持った年長者。他方の若い少女は、異国イスラエルから入って来た移民です。単に異国からの移民というのではなく、戦争に負けて、捕虜として連れられて来た存在です。負けた側の人間。力無く弱い存在。社会的地位も、財力もない。自立なんて決してできない。女性・捕虜・移民・少女。ナアマンからしてみれば、欠点だらけの存在。自分と共通する側面なんて、一つもない。その少女の言葉が ３ 節に記されていて、物語の結末だけから言えば、彼女は真実を伝えていることになります。「ナアマンが、イスラエル王国のサマリアに行って、そこで預言者に会えば、彼の病気は癒されるはずなのに」。その結末に至るまで、つまり、ナアマンの病気が癒されるまでの道のりは、決して平坦ではありませんでした。ナアマンの側に、ためらい、葛藤、躊躇があったのです。ナアマンは彼女の言葉を直接に聞こうとはしませんでした。彼女の側に行き、耳を傾けようとはしませんでした。少女の言葉は、彼の妻の口を通して、間接的にナアマンの耳に届けられたに過ぎません。その様子は、自分にとって都合のよいもの、利益になることだけを引き出して、それ以外については、自分とは決定的に異なる存在を遠ざけるかのようです。また、サマリアにいる預言者エリシャとの出会いの場面でも、ナアマンのためらいが如実に現れています。預言者エリシャは、少女と同じく、国籍も、職業も、身分も、ナアマンとは相容れない人物です。自分の方が優れているという感覚があったのでしょう。自分の思うように、自分の益になることをしてくれるなら、その範囲で言うことを聞こうとしていたのだろうと推測されます。エリシャからの提案は、ナアマンが期待していたものとは異なるものでした。だから、その提案に対し、ナアマンは強い嫌悪を抱いています。二度にわたり、怒りを表し、エリシャのもとから立ち去っているのです。わざわざ、女性である妻の言葉を聞いて、王に頼み込んで国境を越え、辺境の地で預言者と呼ばれる人物に会いに来たけれども、この時点でナアマンに変化はありません。病気は癒されていません。ナアマンを変える後押しとなったものは、彼の「家臣たち」の言葉でした。ナアマンより身分の劣る者たち。社会的地位にしても、経済力にしても、武力にしても、彼より劣る存在。ここだけを見れば、ナアマンの家臣たちは、「イスラエルから連れられて来た少女」と同じような境遇にある人たちと言えるでしょう。あるいは、その少女の代弁者とも言えるかもしれません。もっとも、家臣たちは、ナアマンと同郷の人たちですので、イスラエルの少女に比べると、よりマイルドな意味での異質者です。だからでしょうか、ナアマンはその家臣たちの言葉を聞き、態度を改めました。預言者エリシャの言葉を受け入れ、行動を起こし、結果、病気が癒されたのです。14 節「少年の体のように清くなった」。ここで「少年」と訳されている言葉は、２節で「少女」と訳されてい

る言葉と同じ語根を持った単語です。ですから、「ナアマンが少年のようになった」というのは、いわば「彼がイスラエルの少女と同じ立ち位置の存在となった」ということを意味しているのではないでしょうか。実際、ナアマンは、病気を癒された後、再び預言者エリシャのもとに、今度は誰かの助言によってではなくて、自分の意思で出向いています。さらに、そこで、ナアマンは、エリシャの信じる神以外、自分も信じることはないと宣言しているのです。アラムの国では、エリシャの神を信じることは、異教の神を信じること。その社会において、多数とは異なる存在になることを意味します。多数の人たちから、「異質の者」として見られるようになるのです。ナアマンは、それまでは、表面上で自分の利益に資する範囲で、異なることを受け入れていたに過ぎませんでした。ですが、エリシャの言葉を受け入れ、イスラエルの少女が語った通りに癒された瞬間に、今度は、自分自身が異なりを体現する者として生きる決意をしたのでした。

いくつもの境界線を越え、癒され、変えられていったナアマン。ですが、それより先に、ナアマンより大胆に、潔く、自分と他者とを分け隔てる壁を、線を越えていった存在がいます。イスラエルの少女。ナアマンの住んでいた国、アラムにあって、完全な異質者でありながら、異なることによる壁を越えて、ナアマンとの交わりを、そしてナアマンにとっての救いを求め、願っていた人。わたしたちが生きる世界には、様々なところに、人と人とを隔てる線が引かれています。財力、容姿、国籍、言語、文化、歴史感、地位や身分、体力や学力、性別、などなど。様々な基準によって、社会に、地域に、教会に、あるいは自分自身の中に、たくさんの分断が生まれています。そんな中で、わたしたちは日毎に思い出させられます。本日のイスラエルの少女のように、大胆に、潔く、境界線を越えていった人のことを。わたしたちが主として仰ぐイエス。その歩みを振り返るとき、常に、異なりを悠々と越えていく姿を目撃します。違いということに優劣をつけずに、どんな人であっても、その人の隣にあることを求め続けたイエス。異なりを持つ人たち、なかでも、社会の多数から、「劣る」と見なされていた違いや異なりを持つ人たちを、心から愛し、共に生きる道を歩み続けたイエス。最も小さくされた人、自分の意思とは関係なく、底辺に追いやられている人。その人たちの存在に目を向け、声や言葉に耳を傾ける。いや、単に目を向けて、耳を傾けるだけではなく、自らがその者たちの存在を自分の身に引き受け、その人たちと共に生きていくこと。そこにこそ、イエスの福音のメッセージが、光を放って輝いているのです。イエスに出会い、イエスを信じるキリスト者は知っています。人は変われる。世界は変えられる。一人ひとりが、イエスによって変えられた人生を、今、生きているのですから。イエスの願う神の国、異なりを越えてすべての人が、共に生きることのできる世界。その国の到来のために、今、このとき、この瞬間から、隣人の手を取り、共に歩んでいきましょう。変えるべきところは潔く変える勇気を、そして変えざるべきところはそのままで受け入れる冷静さを持てるようにと祈りながら。